

2022年11月27日降臨節第1主日

イザヤ書 2章 1-5節

ローマの信徒への手紙 13章 8-14節

マタイによる福音書 24章 37-44節

わたしの新型コロナによる体調不良のため、教会のみなさまにはご迷惑をおかけしており、大変申し訳ありません。自宅療養が終了し、今週で自主的な感染予防行動の期間も終わります。先主日、本主日とも、み言葉の礼拝に変更し、司式を信徒奉事者の方をお願いしておりますが、次主日12月4日から復帰できると思っております。先週のミニバザーはいかがでしたでしょうか。主日の昼過ぎ、子どもたちの楽しそうな声が聞こえ、心が安らぎました。

今年も残りひと月ぐらいとなりましたが、教会暦は、新しい暦に入りました。今日から聖書日課もA年となります。降臨節第一主日は、ABC年どの年も、福音書が「終りの日」について、イエス様が語られた箇所が選ばれます。アドベントに相応しいと考えられるからです。クリスマスの備えをするこの期間の最初に、「終わりの日」について学ぶ、このことは、主の降誕を祝う意味と関係しています。クリスマスには、わたしたちと同じ人間であるイエス様の誕生を祝うという意味と、この世界の終わりにすべての救いの完成をもたらすために到来するイエス様を待ち望むという二つの意味があるのです。わたしたちはクリスマスを通して、まさに真の希望、救い、光の誕生と、その完成を待ち望みます。A年の「旧約日課」は、「イザヤ書」2章1節からです。今日は福音書とこの箇所から学んで見たいと思います。

最初に「イザヤ書」から見ますと、この箇所は、『聖書』の中でも「平和」について記している有名な箇所です。それは、イザヤがユダとエルサレムについて見た幻の中で語られました。

「**終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい**」(イザヤ 2:2)。ここにある「終わりの日」が、いつであるかは明確に記されていませんが、何らかの決定的な日を示していることは確かです。つまり、その日に何かが起こるということです。その何かについて、具体的な表現を用いていますが、意味を考えますと象徴的です。それは、「主の神殿の山」すなわちエルサレムの神殿の山が、どの山よりも高くなり、そこに多くの民が集まるということであるからです。つまり、決定的な日に、すべての人が、主なる神様に注目を集めるということです。

そして、次に何が起こるのか、それは「多くの民が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る」(イザヤ2:3)ということです。多くの民が、それぞれの神々ではなく、また自分たちの考えでもなく、主なる神様に歩むべき道を示され、その道を歩むということです。

わたしたちは、これらの言葉を聞いたとき、素直にその通りだと受け入れられると思います。しかし、『聖書』の信仰に立たない人々にとっては、そう簡単には受け入れられない内容です。主なる神様は、イスラエルの神様と聞いていいのですが、イスラエルは、エジプトやペルシアのような大国ではないからです。また、北イスラエル王国を滅ぼしたアッシリアよりも、これから南のユダ王国を滅ぼそうとしているバビロニアよりも小国です。一般的な価値観からすれば、大国、強大な国の神が注目を集めるのはわかります。しかし、(半分)滅んだ王国で信じられている神に注目し、その神の指示に従うということは、ありえないのです。

しかし、預言者イザヤは続けます。「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ2:4)。この言葉は有名です。戦いの道具を農機具に変え、戦うことを学ばなくなることで、武力の均衡が保たれた平和ではなく、主なる神様の望む、まことの平和がなんであるかを語っている箇所です。紀元前に預言者イザヤによって語られたこの平和は、現在も実現していません。また、現在では、多くの国がイスラエルから色々な戦いの方法を学んでいます。

それでも預言者イザヤは続けます。「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」(イザヤ2:5)。この部分は、ほぼ直訳です。「ヤコブの家」とはイスラエルことですが、時間と空間を超えてイスラエルに呼び掛けているといえます。その意味では、イエス様を通した新しいイスラエルといえる、教会に集められる人々も含まれます。「光」とは、一般名詞の「光」ですが、天地創造の際に、主なる神様が「光あれ。」(創1:3)といわれた「光」です。主の光が表れる前は、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」(創1:2)のです。「主の光の中を歩む」とは、それ以外は、暗闇を歩くことになると語っているのです。

先ほどイスラエルは小国に過ぎないと申しましたが、イスラエルを滅ぼした国々は、次々とほかの国々にとって代わられました。どの大国も光り続けることはなかったのです。もちろん、王国としては、イスラエルも滅びました(「イザヤ書」の前も後も、そしてイエス様の時代も)。しかし、主なる神様は信じ続けられています。そのように輝き続ける光の中を歩め、そのよう

にイザヤは呼びかけているのだと思います。

本日の福音書は、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである」（マタイ 24：36-37）と始まります。「その日」とは、「人の子が来る日」であり、「終末の日」です。イエス様のその言葉の中で、ノアの箱舟のことに簡単に触れ、「人の子が来る場合も、このようである。」（マタイ 24：39）と結んでいます。

ノアの箱舟の出来事とは、そもそも、「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（創 6：5-6）と、主なる神様がこの世界の荒れようを見て、一度世界を終わらせた出来事です。現代風に言えば、世界全体を洪水で一回リセットした出来事です。そして洪水の後、主なる神様は「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」（創 8：21）と決め、ノア・人間と虹の契約を交わします。すなわち、人間の世界に直接介入することをしないと決められたのです。新しい契約に生きるわたしたち教会は、古い契約という言葉を用いますが、このノアとの虹の契約も古い契約の一つです。

さて、ノアの出来事以降、この世界の責任を負うこととなったのは勿論人間です。そしてそのための指針として主なる神様は「律法」を与えました。その法律の通り歩んでいけば、この世界は主なる神様の前に平和になるはずでした。しかし、世界中で戦いは繰り返され、現在に至っています。それゆえに、その「律法」を広めることは今も大切だといえます。しかし、先に「イザヤ書」が示した、まことの平和のしるしを学ぶことも大切です。

そのような事柄を前提とした上で、イエス様は本日の福音書の中で、「終りの日」についての教えを語ります。その内容は、ノアの出来事と同じくらい少し恐ろしいものです。また犠牲者が出るのは仕方がないというようなことも書かれています。だから目を覚ましていなさいと教えておられるのですが、なんとも納得いかない部分もあります。イエス様は、この黙示的な言葉で何を語ろうとしたのでしょうか。

イエス様がこの言葉を語られた時、ユダヤは戦争中ではありませんでした。しかし、その言葉が収められた「マタイによる福音書」が書かれた時代は、ユダヤはローマ帝国との戦争に破れ、神殿も崩壊していました。犠牲者についてのイエス様の言葉は、記憶に新しい身近なことであったのです。イエス様は、そのような中で自分を信じるものだけが例外的に救われると教えられたのでしょうか？そうではありません。原始キリスト教会の人びともそのよ

うには受け止めていないと思います。この未来に対する少々暗い予告的な記事から、人間の様々な思いを越えたところにある本当の平和を望み見ていたのだと思います。

今日のわたしたちの世界にもまだ戦いがあります。世界中のどこかで戦いが繰り返されるような時代、という意味では、イエス様の登場以前も以後も変わりません。しかし、同時にわたしたちはつねに、『聖書』から主なる神様が、どのような意志でこの世界を創造され、また何を望んでおられるかを知ることができます。本日、わたしたちが、クリスマスを迎える準備、その最初の主日に、この「イザヤ書」とイエス様の教えから学んでいることもその一つです。そして、わたしたちのその歩みは、まことの平和を望む人がいることの証です。まことの平和のあり方を忘れないために、今年も、平和の主である御子の誕生を祝いたいと思います。そのための準備を整えたいと思います。

本日は、説教の後、洗礼志願式を行います。本来ならば、牧師であるわたしが司式なのですが、冒頭に述べた理由から、わたしがそれをおこなうことができません。本日のみ言葉の礼拝の司式を、先週に続きお願いしている信徒奉事者であり教会委員のおひとりの方をお願いいたします。ただし、わたしは、これはこれでよかったかなと思っています。

現在の日本聖公会ではあまりないかもしれませんが、日本のプロテスタント教会では、洗礼を希望する人を導く役割を、教会の長老・教会委員である方が行う場合が少なからずあります。プロテスタントでは牧師の任期は比較的長いのですが、それでもその教会を支えてきた人から、しっかりとこれから自分がかかわる教会について学ぶのです。もちろん、わたしたちの聖公会は、プロテスタント教会のような各個教会主義ではありません。東京聖三一教会で洗礼を受けることとは、東京教区の一員となること、そして、日本聖公会、さらには世界のアングリカンコミュニオンの一員になることを意味します。それはそうなのですが、わたしよりも東京聖三一教会の関わりも、信仰歴も長い方に、洗礼志願の式を行っていただくことは、洗礼の日のことを思い出すたびに、大切な事柄となると思います。

洗礼を受けるとは、「終わりの日」を自覚することです。洗礼を受けた歩みとは、わたしたちの世界がどのようなであっても、主なる神様は、イエス様を通して信じる人々を、最後には救いへと導いてくださる、その自覚と安心から歩み続けることです。すでに洗礼を受けているわたしたちも、あらためてこの世界が少しでも平和になるような歩みを、わたしたちの教会を通して進めていきたいと思います。